

金沢区のすべての公立小学校・中学校を訪問してきました。

インターンシップで勉強に来ている大学生のみなさんに協力してもらい、2月から4月にかけて、金沢区内の公立の小学校・中学校を全校訪問し、校長先生にインタビューしてまいりました。4月16日の富岡中学校を最後に小学校21校、中学校9校、小中一貫校1校と、全ての公立小中学校を訪問することが出来ました。



最初に訪問したのは2月10日の釜利谷南小学校でした。田中綾子校長先生は、とても明るい元気な校長先生で、地域との交流や学校教育支援隊、学校運営協議会に対しては、積極的にお願いをしている。実際に児童たちと交わってもらうことでさらに交流や信頼関係は深まるので、PTAや町内会の役員さんたちにも、積極的にお願いすることが成功に繋がっていると説明してくれました。



それぞれの学校では①英語や国際教育の取り組み ②地域のボランティアの協力 ③地域社会との防災の取り組み・連携 ④道徳教育や郷土愛を育む取り組み ⑤体力強化や部活動の特色 ⑥学校組織の強化や人材育成について質問をして、最後に校長先生の『モットーや信念や座右の銘』を伺いました。その他にも、いじめ問題・中学や幼稚園保育園との連携・スマートフォンや携帯電話の問題点など各校独自の課題などについても聞かせていただきました。

短期間に区内の全ての公立小中学校を訪問して、最も感じたことは人口20万人の金沢区の中でもそれぞれの小学校に地域性に合った特徴があること、校長先生のキャラクターによっても学校の雰囲気の違いがあること、全部の校長先生がそれぞれに素晴らしい人格者で、信念を持って学校経営をしっかりと行っていることです。いろいろな悩みや難しい課題も聞かせていただきましたが、決してあきらめず、先送りせず、無理もせず、それぞれの校長先生がしっかりリーダーシップを発揮されていました。



横浜市の市立小学校は約9700人の教員、18万5千人の児童の中で343人しか校長先生はいません。市立中学校は約4900人の教員、8万2千人の生徒の中で148人の校長先生です。一人の校長先生が小学校の場合は平均28人の教員と539人の児童のリーダーであり、中学校の場合は平均33人の教員と554人の生徒を統括する責任者なのです。特に小学校はクラス担任制ということもあって教師の事務作業量も多く、子供と接する時間や地域と交流する時間なども管理職が時間を作る努力をしなければほぼ何も出来ないほどの忙しさだと、多くの中学校の校長先生が話してくれました。

外国籍の子供で日本語指導が必要な子供が5人以上いる場合には専門に指導する教師が1人配属になり、日本語教室が設けられます。しかし日本国籍があっても親が外国人に繋がる日本語の不自由な子供はこの人数に入れることは出来ません。この問題については早速3月の予算特別委員会での総合審査で取り上げ、市長に柔軟な対応を要望しました。日本語指導が必要な児童を抱える学校には地域のばらつきもあり、深刻な課題であるのかどうかも学校によって違いがありました。また、外国語ボランティアは横浜市大にある国際交流ラウンジのカモメサポーターなどが助けてくれたり、近隣の日本語が堪能な外国人を町内会の役員さんが紹介してくれることもあるそうです。



地域のみなさんのボランティアは特に小学校では熱心で、朝夕の見守り・読み聞かせ・クラブ活動・調理や裁縫の補助など地域の人材やPTAの協力は多岐にわたります。また、地域のお祭りに教職員が積極的に参加したり、学校施設を活用した地域のイベントなどにも多くの小学校で取り組んでいます。中学校になると生徒たちも部活で忙しく、授業も専門化してくるので地域とのつながりは少なくなりますが、部活の指導などは地域の元選手による指導などがもっと増えるべきと感じました。



地域の防災訓練と学校での防災訓練がリンクしている例は少ないようでした。地域防災拠点の学校にある備蓄庫もその地域の町内会と学校の関係の濃淡によって中身が異なります。町内会の備蓄品も学校の備蓄庫で預かっていたり、大道中学校などではどこに何があるかを町内会がファイル管理して完全に把握しているというケースもありました。各学校の備蓄庫に町内の備蓄品がどれだけ収容されているかは、危機管理室でも消防局でも教育委員会でも把握しておらず、学校によって備蓄品に格差が生じているのも事実でこれも調査すべきと提案しました。

道徳教育や郷土愛といった安倍政権が以前から進めていた政策については、学習指導要領に則って行われていますが、郷土愛に通じる地域のフィールドワークなどは各学校で地域性を活かして取り組んでいました。中学校は2年次に2日間の職業体験カリキュラムの実施が決められており、管理職がお店や事業所に交渉するのも大変なようでしたが、街のパン屋さんや美容室から鉄道会社やファミリーレストランなど、多岐に渡っていて生徒たちにも良い勉強になっているそうです。道徳の授業は、評価を数値化することには抵抗があるようでしたが、普段の授業や朝礼などでも身に付くものではないかという意見も多くありました。



体力強化や部活の取り組みについては、長縄とび・中休みランニング・健康体操・全校遠足などが多くの学校で取り組まれていました。中学校の体力づくりは部活動が中心で、最近ではサッカーのクラブチームに所属して中学校では陸上部とか、野球のリトルシニアのチームに入っているのでも学校では部活に入らないというケースもあるそうです。体力については、運動能力の高い子供と劣る子供の二極化が顕著になっており、劣る子供たちのボトムアップが課題だとのことでした。



どこの学校も若い世代の先生が増え、団塊世代のベテラン先生が定年期となり、中堅層が圧倒的に足りないとの悩みを抱えています。若い教員たちは能力も体力もあるので、経験不足を補う先輩からの継承は大切で、現場での指導やアドバイスをもっとあげたいと校長先生たちは考えています。また、中学校区での小学校間や中学校、小学校区での幼稚園や保育園との連携にはどの学校も熱心で、入学後の子供たちがスムーズに学校に溶け込む努力がしっかり実践されていました。その他には地域との交流として横浜市大の医学部の学生と人形で乳児の入浴体験をしてみたり、工場見学に行って温暖化対策の実習をしたり、海苔作りを体験したりと、それぞれの学校で独自の取り組みをしているのも良く分かりました。

全ての公立学校が金太郎飴のような教育をして同じようなタイプの子供ばかり育成しているのではありませんでした。それぞれの学校が地域の特性と先生たちの個性を活かして、地域社会の協力も得て、ひとりひとりの子供たちを育てていることがよく分かりました。政治家として必要な点はしっかり支援し、問題点があれば指摘・改善をして、横浜・金沢の将来を担う子供たちをしっかりと育ててもらえるように、これからも小学校・中学校には定期的に訪問し、状況を掴んでおきたいと思えます。